

日本人学生と留学生を対象にした 「グローバル日本語」養成のためのワークショップ報告

中河 和子
濱田 美和

A Report of the Workshop to Cultivate “Global Japanese” for Japanese Students and Foreign Students

NAKAGAWA Kazuko
HAMADA Miwa

要 約

本稿は、富山大学国際機構教育部門で2018年度後期と2019年度前期に実施した日本人学生向けワークショップ「国際人としてのグローバル日本語—外国人とわかり合うための日本語コミュニケーション—」の報告である。本ワークショップは、上級レベルの日本語能力を有する留学生を対象とした「日本文化」の授業に数回日本人学生が参加し、留学生と対話活動を行い、授業終了後にふり返りを行うという内容である。ワークショップ終了時に実施した学生へのインタビューおよびふり返りでは、対話活動への肯定的評価がほとんどだった。特に日本人学生に「自身の今後のためにも対話力≒グローバル日本語力の成長が必要である」という認識と、「対話の維持・促進には、ホスト社会の母語話者側が言語的文化的配慮をすることが必要である」という気づきが観察され、日本人学生と留学生の対話活動は、日本人学生への教育的意味が強いことが示された。留学生からは、深い話題について日本人と語り合うときの「援助の必要性の認識」と「深い話題を語り合える日本人の友人への希求感」が観察され、留学生対象の「日本文化」、「日本事情」授業にこのような対話活動を組み込むことの有効性が示唆された。

【キーワード】 日本人学生、外国人留学生、グローバル日本語、対話活動、異文化調整力

1 はじめに

日本人学生がグローバルに活躍する必要性を否定する人はいないだろう。では、グローバルな場で機能する日本語とは何だろう。筆者らはそれを「異なった文化・言語を持った人とも意思疎通や相互理解がしやすい日本語」とした。それは意思疎通のしやすさのため言語形式が簡略化され、内容も単純になった日本語ではない。そして、そのグローバル日本語を操るには、異なった文化（同国人における世代・階層などの異なりも含めて）・異なった価値観の人と、建設的に意見を交わし合い調整できる力、すなわち異文化調整力が必要と考える。これは外国語ができる以前に、母語でもその力が獲得されていなければならない。つまり外国語がいくらできてこの異文化調整力がなければ、ただの翻訳機人材になるからだ。

はじめに、なぜグローバル日本語が日本人学生にとって必要なのか、またグローバル日本語と対話活動の関連について述べる。

1.1 実践の背景

文化は国や民族だけで共有範囲をくくられるものではなく、日本社会における異なる世代間や異なる職業間における文化的差異も異文化だが、学生時代には異なった国、社会、言語圏の異文化に触れるべきだとし、海外留学を奨励している大学は多い。今の社会で日本人学生に特に求められているグ

ローバル性は、異なった国、社会、言語圏にまたがるものと言えるだろう。しかし、大学というところは国内に居ながらにして異なった国、社会の異文化と接触できる格好の場でもある。それは外国人留学生（以下、留学生）の存在があるからである。

日本の大学の多くは、留学生の受け入れを進めており、留学生と日本人学生が共に学ぶ機会も増えているが、彼らは同じ大学という空間に身をおけば、自然に接触・交流を始めるわけではない。それよりも、留学生と接する機会の多い日本語教師がしばしば耳にするのが「日本人学生の友人がなかなかできない。あまり話もしない」という留学生の嘆きである。例外もあるだろうが、留学生と日本人学生の接触の頻度が少なく、その深度が深くないことは、日本語教師の多くが感じていることである。

これは、留学生にとってもまたホスト側の日本人学生にとっても大きな損失である。学生時代に異なる社会、文化圏から来た者同士が接触し意見を交わすことは、それぞれに大きな収穫があるからだ。彼らの接触の機会のセッティングも多くされているが、どんな「場」を設定されても、留学生・日本人学生双方に、人間関係を構築し深化させるコミュニケーションの力がなければ、両者に一定の密な関係は生まれない。

ここ数年「日本人学生のコミュニケーション力の欠如」がある種の社会的問題として取り上げられている。日本人学生が「日本語で」コミュニケーションする力が弱いのでは、という日本社会の危機感を裏付けるものとして、企業人事担当者が新卒採用時にどのような力を重視するかという日本経済団体連合会（以下、経団連）の調査結果があげられる。企業人事担当者に行った経年調査（2018年度）¹⁾では、新卒採用にもっとも重視した力は16年連続でコミュニケーション能力がトップである。82.4%の会社がトップに選んでおり、2位の主体性（64.3%）を大きく引き離している。ちなみに語学力をもっとも重要とした企業は6.2%である。企業担当者がコミュニケーション能力を新卒者に強く求めているということは、その力の欠如を痛切に感じているということの表れだろう。

では、ここで人事担当者が言うコミュニケーション力とはどのような力を指しているのだろうか。経済界が求めるコミュニケーション力と相互に密接な関係がありそうなものに、文部科学省の中央教育審議会が、経済界始め各界の意見をもとに学校教育におけるキャリア教育の在り方を示した「平成23年（答申）今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」がある。そこでは、キャリア発達に関わる4つの能力として「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」をあげている。その「人間関係形成能力」を構成するのが、自他の理解力を含むコミュニケーション能力で、その能力とは「他者の個性を尊重し自己の個性を發揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む」力だとしている。また同じく経済界が企業人材の指針とする経済協力開発機構（以下、OECD）は、3つのキーコンピテンシー（主要能力）をあげている²⁾。その1つに「多様な集団における人間関係形成能力」をあげ、その能力は「他人と円滑に人間関係を構築する能力」「協調する能力」「利害の対立を御し、解決する能力」から成っているとしている。

キャリア教育でその養成が必要とされる「人間関係形成能力」とOECDの「多様な集団における人間関係形成能力」は、筆者らがグローバル日本語に込める「異なった文化（同国人における世代・階層などの異なりも含めて）・異なった価値観の人と、建設的に意見を交わし合い調整できる力」と通じるものがある。

1.2 本実践と対話活動

平田（2012b）は、近年の特に若者のコミュニケーション力欠如が指摘されている現象を取り上げ「コミュニケーション能力とは何か」を探っている。それを「わかりあえないことから」という問いから出発し、「対話」に言及している。会話と対話を対比し、会話を「価値観や生活習慣なども近い親しい者同士のおしゃべり」とし、対話を「あまり親しくない人同士の価値や情報の交換、あるいは親しい

人同士でも、価値観が異なるときに起こる価値の摺りあわせなど」としている。そして、日本には歴史的に対話の言葉がなく、対話の政治がなく、対話の国語教育がなかったことが問題であると指摘する。

日本語教育では、1990年代からFreire (1979)、Bakhtin (1988)などの理論を援用し、また近年では上述の平田の説と実践を参考にし、「対話活動」や「対話力の養成」の重要性が唱えられてきた³⁾。学校教育や医学・看護などの場からも「対話教育」の必要性の声が、多くあがっている(多田2006、堀越2015など)。対話とは何かについて、学校教育における対話教育の第一人者の多田(2016)は、対話の機能に次の3つをあげている。1つ目は「お互いの考えや感想、情報などを伝達し合う」こと、2つ目はそれにとどまらず「意思や感情を伝え合うことを通して『人と人とのかかわりづくり』をする」こと、最後に「自己との対話や他者との対話を通して、新たな解や智慧を創発していくこと」としている。そして、筆者らの言う「グローバル日本語」の根幹には、この対話力がある。

筆者(中河)は、留学生始め外国人への日本語教育においても、日本語教育の目的を「日本語という外国語を操る技能の伸張」のみとして捉えず、対話力を獲得することだという立場を取っている。日本留学の機会に関係を取り結ばない留学生と日本人学生の問題の要因の1つには、両者の対話力の欠如があると考えており、そのような問題意識から、自身の担当する留学生対象の授業、富山大学国際機構日本語プログラム「日本文化C」の場を用い、日本人学生・留学生協働の対話力養成を目的とするワークショップ「国際人としてのグローバル日本語—外国人とわかり合うための日本語コミュニケーション—」を、日本語プログラムのコーディネーター(濱田)と共に企画・実施した。中河は地域日本語教室で、外国人住民と日本人住民による対話活動を2006年より現在まで行っている。富山大学医学薬学教育部(杉谷キャンパス)でも2011年後期より2018年後期まで、日本人市民ボランティアに参加してもらい、対話活動の授業を通年にわたって行った。しかし、「日本文化C」ではカリキュラムなどの関係で通年の対話授業は尚早と考え、また日本人学生の参加しやすさにも配慮して、1学期15週の授業のうち3週を対話活動に充てることとした。

本稿では、2018年度後期と2019年度前期に実施したワークショップについて報告し、ワークショップ最終回終了後に行った「振り返り」の結果をもとに、日本人学生・留学生双方の視点からのワークショップの有効性と課題を述べる。以下、本稿で対話活動と述べているものは、このワークショップで行った「対話活動」であり、時に対話活動とワークショップは同じ意味で用いられる。

2 「日本文化C」授業概要

まず、ワークショップの場となった留学生対象授業の「日本文化C」について概要を述べる。

「日本文化C」は、富山大学国際機構で開講する日本語プログラム上級クラスの科目の1つである⁴⁾。上級クラスは各期(15週)9科目をすべて選択科目として提供している。2018年度後期と2019年度前期は、いずれも水曜日4限(14:45～16:15)に開講し、中河が授業を担当した。

2.1 受講者

受講者の多くは日本語能力試験N1、N2レベルの日本語能力を有するが、N3レベルの留学生も受講している。2018年度後期は9人(国・地域別:中国5人、ロシア2人、台湾、ベルギー各1人、学部別:人間発達科学部3人、人文学部2人、経済学部、芸術文化学部、人間発達科学研究科、経済学研究科各1人、在籍身分別:特別聴講学生、研究生各3人、日本語・日本文化研修留学生、修士課程1年生、特別研究学生各1人)、2019年度前期は15人(国・地域別:中国7人、台湾2人、インドネシア、タイ、チリ、フィリピン、ベルギー、ロシア各1人、学部別:人文学部4人、人間発達科学部3人、経済学部、人文科学研究科、経済学研究科、理工学教育部各2人、在籍身分別:特別聴講学生4人、日本語・日本文化研修留学生3人、科目等履修生(県費)、修士課程2年生、研究生各2人、修士課程1年生、特別研究学生各1人)が受講した。

2.2 授業の目的と達成目標

授業の目的は、留学生として日本社会をできるだけ分析的に観察する試み（情報の読み取り・整理など）を、様々なメディア（テレビ番組、アニメ映画、漫画、新聞・雑誌記事、自治体広報など）を用い、そこから得たものを日本語で情報発信する力を養成することである。

達成目標は、1つのテーマをなるべく多角的に捉え、日本社会に対して既に持っている知識や、自文化への固定的な見方を洗い直す力をつけることである。日本語の面からは、自身の述べたいことをまとめた談話として構成する力を養うことを目標としている。

2.3 達成目標実現の問題点

この授業目的と達成目標を支える教育目的は「必要十分な日本社会への一般教養知識のもと、健全な批判精神を持って、自他の文化を見直し、自身の考えを表明できること」である。そのために、狭義の日本語力（文法運用の正確さや語彙の多さ等）は、重視しないとしている。

留学生には、授業1回目のオリエンテーション時に「自身のコミュニケーションのあり方を見直す」として「会話と対話の違い」「どのような姿勢が対話を可能にするか」などについて考えさせ、対話力養成を企図している。留学生同士の意見交換やディスカッションの時は、対話力養成のきっかけとなるような仕かけをするが、留学生同士の場合、日本語力の狭義の能力観、すなわち文法運用の正確さ、語彙の多さなどにとられる傾向がぬぐえず、上述の教育目的の達成には少なからず課題を感じていた。

2.4 授業スケジュール

授業スケジュールを表1に示す。第1週にオリエンテーションを行った後、第2週～第15週までは、2～3回で1つのテーマを取り上げ、そのテーマを題材とした映像・読解資料をもとに、現代日本社会を観察し、グループでディスカッション、発表を行う。そして、最終週にまとめを行い、各自レポートを作成するという流れである。

表1 「日本文化C」授業スケジュール

	2018年度後期	2019年度前期
第1週	オリエンテーション, 対話力について	オリエンテーション, 対話力について
第2週	本授業で扱う文化について	本授業で扱う文化について
第3週	日本の企業文化－新人社員研修事例－(1)	日本文化って？
第4週	日本の企業文化－新人社員研修事例－(2)※	今, 興味あること ※
第5週	ステレオタイプ(1)	憲法と日本人(1)
第6週	ステレオタイプ(2)	憲法と日本人(2)
第7週	今, 興味あること ※	憲法と日本人(3)
第8週	日本の若者－草食男子－(1)	ステレオタイプって？ ※
第9週	日本の若者－草食男子－(2)	若者意識(1)
第10週	ジェンダー ※	若者意識(2)
第11週	現代日本の流れ(1)	若者意識(3)
第12週	現代日本の流れ(2)	留学生と日本人は, なぜ親しくなりにくいのだろう※
第13週	公害	現代日本の流れ(1)
第14週	期末試験	現代日本の流れ(2)
第15週	自分を知る－ストレスパターン－	まとめ

※はワークショップを実施した回を示す。

3 ワークショップ概要

富山大学国際機構教育部ワークショップ「国際人としてのグローバル日本語—外国人とわかり合うための日本語コミュニケーション—」は2018年度後期に初めて開催し、2019年度前期も継続して行った。活動内容は、留学生対象の授業「日本文化C」に参加して留学生と日本語で対話活動をした後、授業担当教員である中河とその日の活動を振り返るというものである。ふり返りの時間は授業終了後の30分とし、濱田も同席した。いずれの学期も「日本文化C」の授業15回のうち3回を日本人学生が参加する形とした。

広報は、2018年度後期は学内の掲示板でワークショップの案内を掲示する方法で行った。2019年度前期はポスター掲示に加えて、富山大学学術情報システム（ヘルン・システム）の掲示板にも掲載し、システムからメールでの通知も行った。2018年度後期に参加した学生からの助言を受けて行ったもので、2019年度前期はヘルン・システムからのメール通知で情報を得てオリエンテーションに参加したという学生が多かった。ポスターには、「富山大学の外国人留学生と『日本語で』さまざまなテーマについてちょっと深い話をしてみませんか？」という呼びかけで、次の3つの力、(1)さまざまな価値観、考え方に触れる→調整力アップ、(2)自分の日本語を外から見直す→わかりやすく魅力的な日本語コミュニケーション力アップ、(3)日本語を客観的に見るスキル→外国語学習にも役立つ、これらが身につくことをアピールした。ポスターの内容についても、「ちょっと深い話」だけではわかりにくいという2018年度後期の参加学生からの助言を得て、2019年度前期には「さまざまなテーマ:仕事観、教育、サブカルなど」と具体例を加えた。

ワークショップに参加した日本人学生は、2018年度後期は2人（学部別：人文学部2人、学年別：2年生1人、3年生1人）、2019年度前期は10人（学部別:経済学部、理工学教育部各3人、人文学部2人、人間発達科学部、理学部各1人、学年別：学部1年生1人、学部2年生4人、学部4年生2人、修士課程2年生3人）だった。

4 ワークショップ実践

4.1 実施日と対話のテーマ

実施日と対話のテーマを表2に示す。対話活動のテーマは、「自己と社会」と「自己と他者」と「自己と自己」の大きく3つに分類され、自己を軸にして社会を、他者を、自己内部を見つめ直すことを意図した。この3つは重なり合うものであり、便宜上の分け方である。1学期に15回対話活動を行う富山大学医学薬学教育部のクラス（1.2参照）では、この分類を使ってテーマのバランスを取ってきた。さらに対話活動においては、最終的にメンバーシップを培うことが重要だと考えているので、序盤はアイスブレイキング的なテーマ、そこからクラスの「場」の特徴を考えながら、それぞれが自己表現しやすいもの・クラス全体を成長させやすいものに移行させてきた。

本ワークショップは、1学期に3回のため、富山大学医学薬学教育部での1学期通しての対話活動クラスのやり方の原則を取り入れながら、テーマのバランスを考え、アイスブレイキング的なものから、場の変化を観察して、学生それぞれが自己表現しやすいものを探り決めていった。

表2 実施日と対話のテーマ

2018年度後期		2019年度前期	
実施日	対話のテーマ	実施日	対話のテーマ
10月24日	オリエンテーション	5月8日	オリエンテーション
10月31日	日本企業の新入社員研修の事例について	5月15日	今、興味あること
11月28日	今、興味あること	6月12日	ステレオタイプって？
12月19日	ジェンダー	7月10日	留学生と日本人は、なぜ親しくなりにくいのだろう

4.2 日本人学生へのオリエンテーション

オリエンテーションでは、以下に示した資料に基づいて目的を伝え、その重要性の説明と動機付けを試みた。また、ごく簡単にだが、対話を維持するための「言語面・態度面」の留意点の理解を促した。(巻末資料1)

また、ワークショップの前日までに日本人学生全員に、対話活動のテーマ、対話をする際の簡単な留意点、前回の対話活動での留学生の反応の簡単な報告などを書いたメールを送った。このメール送信は、テーマを知らせる目的や、留学生との対話に自信が持てないだろう学生へのエンカレッジメント等の目的が主だったが、参加のリマインドの意味もあった。日本人学生が、まだ留学生との対話活動にどれくらい意義や楽しみを見出しているか不明な上に、バイトやサークルで多忙な彼らは月に1度のワークショップにメンバーシップを感じにくいかもしれないと思ったからである。このメールが日本人学生の参加姿勢にどのような影響を与えたかは調査していないが、全3回とも欠席者は1～2名で全て欠席理由について連絡があった。

【日本人学生対象のオリエンテーション資料：抜粋】

1. ワークショップの目的

- 1) さまざまな価値観・考え方に触れる→調整力アップ
- 2) 自分の日本語を外から見直す→わかりやすく魅力的な日本語コミュニケーション力アップ
※日本人とのコミュニケーション力もスキルアップします
※コミュニケーション力は、日本企業が採用時にもっとも重視する力です
(経団連調査 2017 より)

3) 日本語を客観的に見るスキル→外国語学習にも役立つ

いろいろなことを対話することで、日本人学生・留学生が共に日本語力をつけていくことをめざします。

さらに、外国人・日本人共に日本社会・母国社会で自分が持っていた既成概念や思い込みを見直す機会にします。

このクラスでは、留学生ではない学生を「サポーター」と呼びます。

2. 対話力とは

3. 活動の流れ 講師の役目 日本人学生の役目

4. 対話するときの注意すること 1) 態度・心理面で 2) 言語面で

4.3 対話活動の実際について

対話活動では実にさまざまなことが起こっているが、紙幅の関係上、いくつかのポイントについて簡単に述べる。まず対話活動の流れはいくつかあるが、主な流れは、序盤に問題提起、ブレインストーミング、対話の動機付け等が行われ、中盤は留学生と日本人学生の原則ペアによる⁵⁾対話活動、終盤は各ペアによる発表が行われるというものである。発表はインタビュー、ドラマ、独話など各ペアが工夫をこらす(巻末資料3)。

教師の主な役割は、ペアのマッチングと、序盤の問題提起やブレインストーミング、中盤のペア活動への教育的介入、全体の時間管理である。筆者(中河)はペアのマッチングが対話活動の成否を決めると考えているが、このマッチングのポイントの1つは日本人学生の日本語調整力と留学生の日本語力、もう1つは双方の対話構築力である。対話構築力は日本語レベルとは、原則関係しない。日本人学生でも対話構築力の不足により話を進めるのが不得手な者も多く、日本語力が高くない留学生でも対話構築力によって話を展開・深化させる者がしばしば見られる。1～2回の対話活動で、日本語調整力・日本語力、対話構築力のかかなりの部分は見えてくるが、10組以上のペアを1人で観察するのは

容易でなく、教師の補佐役がいることが望ましい。

ペアの対話活動の場面を見ると、それぞれ活発ににぎやかに話を進めており、クラス全体が活気づいている様子だったが、詳細に観察すると、対話なのかおしゃべりなのかという、いわゆる対話の質の面で問題と感じるものが多々あった。そこに教育的に介入するのが対話活動における教師の役目と考えている。例えば、もっぱら日本人学生からの質問に留学生が答えるのみで、日本人学生だけが話のイニシアチブを取り、さらにそれが深化せず表層的に終わっている例である。また上級クラスで意外によく起きるのが、日本人学生が言っているキーワード的なものが実は理解できていないのに留学生聞き返しができず、そのことに日本人学生も気づかず、互いに理解しないまま話が進んでいる例などである。教師がどのように介入するのが効果的なのかその後の学生の対話力の成長につながるかは、今後も実践・研究を重ねながら検討していきたい。

5 学生の評価

2018年度後期については人数が少なかったのでワークショップ最終日にインタビューを、2019年度前期についてはワークショップ終了後に日本人学生・留学生ともにふり返しシート⁶⁾でふり返しを行った。ふり返しシート（巻末資料2）を、留学生には紙媒体で配布・翌週回収し、日本人学生には電子ファイル（Word文書）をメールで配布・回収した。回答数は、日本人学生は10人中8人、留学生は15人中13人であった。

5.1 2019年度前期学生の評価

ふり返しシートは学生自身が対話活動から何を感じ学び取ったかをふり返ってみるのを目的として行ったものだが、本稿ではそれをもとに、2019年度前期に参加した日本人学生と留学生が本ワークショップをどのように評価しているかを見る。

5.2 ふり返りの視点（項目）

ふり返りの項目を以下に示す。

1. 対話を楽しむことができたか〔5点～1点で、できた・できなかったを自己評価する〕
その際に印象に残ったことは何か〔記述式〕
2. 対話を維持させることができたか〔5点～1点で、できた・できなかったを自己評価する〕
維持の成功・困難の要因について設問にそって、記述式で答える
3. 対話のスキルについて〔できた○ まあま△ できなかった×で、自己評価する〕⁷⁾
 - ①「聴く姿勢」になっていたか（目線、体の向き、姿勢など）
 - ②話し手が考えている間、少し沈黙があっても待つことができたか
 - ③うなずきやあいづちなど、相手の話にしっかり反応を示していたか
 - ④話を聴いている間は、次に自分が話すことや別のことを考えたりしないで、相手の話に集中していたか
 - ⑤自分の興味一関心に引きつけて聞かず、相手が伝えたいことが何かをじっくり考えようとしたか
 - ⑥相手の伝えたいことと自分の理解が合っているか、質問や繰り返しをして、時折確認したか
4. このワークショップに参加しての感想・コメント〔記述式〕

5.3 日本人学生・留学生のふり返りの結果と考察—数値から—

まず数値化されたものの平均点を見る。

表3 日本人学生・留学生のふり返り結果

	日本人学生	留学生
1. 対話を楽しんだか	4.6	3.7
2. 対話を維持できたか	3.0	3.2
3. スキル		
① 聴く姿勢	4.8	4.7
② 待つ姿勢	4.5	4.4
③ あいづち等による反応	4.5	4.5
④ 相手への集中	4.5	3.6
⑤ 正確な理解への姿勢	4.5	3.9
⑥ 理解の手立ての実行	5.0	4.1

日本人学生は「対話を楽しむことができた」は5点中4.6で非常に高い。それに比して留学生は3.7点で、日本人学生より1点ほど低い。5.4節で述べるように、留学生のワークショップへの感想・コメントは肯定的なものがほとんど⁸⁾であることから考えると、留学生にとって日本語での対話は言語的ハンディが大きいので、母語話者の日本人学生ほど楽しむ余裕がなかったという解釈が成り立つだろう。

一方「対話を維持できたか」は日本人学生3点、留学生3.2点と、共に低くはないが、高くは自己評価できないということだろう。後述のふり返りの記述から、日本人学生は対話の維持の責務は母語話者である自分達により強いと感じているようで、このことが日本人学生の自己評価の厳しさにつながった可能性がある。

対話のスキルとも言える傾聴や、相手が話しやすくなるような言語・非言語での合図（あいづち、ターンの交替を急がないなど）、理解確認の実行などに関しては、日本人学生は非常に数値が高い。これも、先に述べたように、対話を維持・促進させるのはホスト社会の母語話者だという責任感の高さがふり返りの記述から窺われ、とにかくその手立ては間違いなく実行したということだろう。では結果的に「対話の維持に成功したか」という自己評価になると前述したように、高くない。これは自己評価の厳しさとも言え、対話維持の意識の高さと考えられる。一方留学生は対話のスキルの中で「相手への集中や、正確な理解の姿勢、理解の手立ての実行」は他と比べて数値が低めである。これは言語的ハンディのためなのか、対話を維持させようという意識の高低に関わるものなのかは、さらなる分析・調査が必要だろう。

5.4 ふり返りの結果と考察—記述から—

5.4.1 日本人学生のふり返りの結果と考察

日本人学生の、このワークショップ（留学生との日本語対話活動）への評価は非常に高いと言える。まず、ふり返り項目1.の「印象に残ったこと」は、ほとんどが肯定的⁹⁾なことで、多くは次のコメントに集約される。「自分では考えられない新しい発想を得た」, 「日本語レベルの高低に関わらない、留学生の個性、思考レベルの多様さへの気づき」である。項目4.のワークショップ全体へのコメントでは、「この対話活動の意義の認識」と、「自身の対話力の成長と課題」に関して述べたものが多かった。（以下は、学生の記述のまま。傍線筆者。Jは日本人学生、番号が同じものは同一学生のコメントを表す。）

J1: 相手の日本語、自分の日本語、相手と対等に対話をすることについて考えさせられました。また、話す姿勢、聴く姿勢などは、外国人に限らず誰と話す時にも大切なスキルだと思うため、勉強になりました。

J2: 対話をする難しさやそれを克服するための対策などについても考えながら活動できたと実感

しているため、今後の生活でも生かしていきたいと思います。

J3：留学生自身の思考レベルは高いので相手の意見の深堀ができると対話が続いた。

J3：1対1ならまだしも2対1の対話は個人の性格や言語レベルのこともあり調整が大変で、留学生に不愉快な思いをさせてしまった場合もあると思っており、サポーターとしては力不足も感じました。

回答者8人のうち、卒業を間近に控えた2人を除く6人の中で5人が来期のワークショップ参加を望んでいる、とコメントしたことも、このワークショップへの肯定的評価とできるだろう。

5.4.2 留学生のふり返りの結果と考察

留学生が、設問1.の「印象に残ったこと」で多くあげたのは、日本人学生が対話維持のためにしてくれたさまざまな手立てへの感謝である。(Fは留学生を表す。)

F1：日本人学生はいつも私/私たちの言いたいことを理解できるまで聞いた。

F2：相手は非常に親切だと思います。私たちはどのように表現することができない時、私たちが助けることができます。

F3：初対面にもかかわらず、彼は正直に自分の考え方を話し合ってくれて、その誠意がしみじみ感じられます。

このワークショップの留学生は日本語が上級・中級レベルの学生である。彼らは日常会話では、すなわち12節の平田(2012b)で言うおしゃべりのレベルであれば、通常助けは必要としない。しかし、彼らはこの言語的援助に感謝している。その感謝の背景には、下記のふり返り項目4.のコメントに見られるように、「日本人といろいろな問題を話すこと＝日本文化・社会への(リアリティのある)情報」, 「日本人の友人作りの機会」への希求感があり、今回それが多少なりとも満たされたことがあるのだろう。

F4：私たちは日本に留学に来たと言っても、日本人とある話題について考えたり、話し合ったりすることはめずらしいです。この活動を通して、すこしでももっと日本人の考え方がわかるようになり、貴重な体験だと思っています。

F5：友達できるし、日本人と話し機会が増えてきた。いろんな問題も対論できる。いい活動だと思う。

F3：(普段はほとんど日本人と接触がない)・・・「対話活動」のおかげで、近い距離で日本人と考える、意見を交換することができて、大変いい勉強になりました。

F6：日本人と友達になりたい!

F2：先生が私たちに与えてくれた機会を感謝します。この授業をきっかけに、日本人と会話することができます。・・・他国の文化や価値観を知り、視野を広げることができます。日本人と友達になりたい。

本対話活動では、上級話者と言えども、いや上級者だからこそ深い日本文化・社会への理解のためには、このようにホスト社会側(この場合は日本人学生)の適切な言語的さらには文化的援助が必要だということが示された。言い換えれば、対話活動は日本人学生にホスト社会側のなすべきことを考えさせるという教育的意味がある。

6 まとめと今後の課題

本ワークショップの学生評価（学生のふり返り）から、対話活動は日本人学生側が、自身のコミュニケーション能力の質を問い、さらにホスト社会側のなすべきことを考えるという教育的意味があることが示された。それには、日本語が技能としてできることが優位に立つ枠組みを取らない本ワークショップの対話活動の仕かけやオリエンテーションが功を奏したのではと推察される。対話活動の仕かけの一例としては、ホスト社会側の言語や文化を完全にマスターしなければ、参入者をその社会の成員と見なさないというような自文化中心主義に通じる考え方への疑問の提示（巻末資料3）などがある。他の例として、オリエンテーションや対話活動では、日本語をネイティブとして操れることと、コミュニケーション力との差異を自覚させるような事例の提示などを折に触れ行った。ただ、ワークショップで行ったどの部分が、日本人学生にホスト社会側の気づきを促したかは、さらなる証左と分析が必要である。

このような対話活動には、ホスト社会側の日本人学生へのオリエンテーションや事後ミーティングによる指導は不可欠だと教師（中河）は考えていたが、ふり返りからそのような示唆も得られた。「授業後の振り返りも今後、対話をする上で気を付けなければならない点を知ることができ、学びになり有意義でした」(J3)である。

本ワークショップは、上述のように参加した日本人学生の多くにとって、自身の日本語コミュニケーション力のふり返りの契機となり、自身の今後のためにも対話力≒グローバル日本語力の成長が必要であるという認識と、対話の維持・促進にはホスト社会の母語話者側が言語的援助をし文化的配慮をする必要があるという気づきをもたらしたことが観察された。ワークショップは、一定の成果を上げたと言えるだろう。

またこの対話活動を「日本文化C」の留学生のほとんどが今後も望んだことや、対話活動から得た日本文化・社会に関する多面的な情報が、さらに深い理解につながる可能性から、留学生対象の「日本文化」や「現代日本事情」と呼ばれる授業に、日本人学生との対話活動を組み込むことの意義と効果を示したと言える。

「日本文化」という名の授業を、イノベティブな視点と仕かけで2002年度後期より続けてきた。試行錯誤の部分も多いが、今後も本ワークショップを活用して、日本文化の枠を越えてグローバルに意義のある授業を模索し続けていきたい。

注

- 1) 新卒採用の際にもっとも重要視したことを25項目の中から5項目選ぶ。
- 2) このキーコンピテンシーはPISA調査（国際的の学習達成度調査）の概念枠組みになっている。
- 3) 日本語教育における対話活動の実相の整理や対話力とは何かについての議論は、まだ半ばと言えるだろう。
- 4) 国際機構の日本語プログラムの科目は、単位認定は行っていないが、交流協定校からの短期留学生と日本語・日本文化研修留学生に対しては富山大学で単位認定を行う科目と同様の基準で成績評価を行い、学生の帰国時に国際機構長名で履修証明書を発行している。
- 5) 日本人学生、留学生の人数配分によって、日本人学生1人に留学生が2人ということもある。その場合、日本人学生にはさらなる力量が必要になってくる。
- 6) ふり返りシートの設問は日本人学生・留学生とも同じだが、留学生のもののみ振り仮名をふった。
- 7) 項目3は数値化に当たって、項目1の評点にならない、○を5点、△を3点、×を1点とした。今回×を付けた学生は1人もいなかったため、○と△を、それぞれ5点と3点で数値化した。ただし、このやり方は4点、2点の存在をどうするかという点において不正確であり、今後改善していく予定である。
- 8) 肯定的でない感想コメントとしては、「3回はすくなくったと思います。そして、毎回日本の学生がちがいましたから、対話の始めはむずかしいです。」というものが1件あった。

- 9) 否定的ではないが、肯定的とは言えないコメントとして、「日本語を全く話せない状態で富山大学に来た方がいて、とても驚いた。」というものが1件あった。

参考文献

- (1) Freire, Paulo (1979) : 被抑圧者の教育学, 亜紀書房 (小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤周 訳)
- (2) Bakhtin, M. M.(1988):ことばのテキスト ミハイル・バフチン著作集8, 新時代社 (新谷敬三郎 訳)
- (3) 中河和子・深澤のぞみ・濱田美和 (2003) : 留学生の現代日本事情理解のツールとしての映像と「映像読解教育」の試み, 富山大学留学生センター紀要, 第2号, 33-44
- (4) 多田孝志 (2006) : 対話力を育てる－「共創型対話」が拓く地球時代のコミュニケーション－, 教育出版
- (5) 平田オリザ (2012a) : 対話への指針, 鎌田修・嶋田和子編, 対話とプロフィシェンシー—コミュニケーション能力の広がりともまりをめざして, 凡人社, 28-45
- (6) 平田オリザ (2012b) : わかりあえないことから—コミュニケーション能力とは何か—, 講談社現代新書
- (7) 鎌田倫子・中河和子・後藤寛樹 (2013) : 日本語教育プログラムとエンパワメント評価—困難な日本語プログラムを如何に支援できるのか—, 日本語教育 155号, 95-110
- (8) 堀越勝 (2015) : ケアする人の対話スキル ABCD. ケアする人の対話スキル ABCD, 日本看護協会出版社
- (9) 多田孝志 (2016) : グローバル時代の対話型授業の研究, 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科 (博士論文)
- (10) 中央教育審議会 (2011) : 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について,
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf
2019年8月27日
- (11) 一般社団法人 日本経済団体連合会 (2018) : 2018年度新卒採用に関するアンケート調査結果,
<https://www.keidanren.or.jp/policy/2018/110.pdf> 2019年8月27日
- (12) 文部科学省 : OECDにおける「キー・コンピテンシー」について,
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/039/siryu/attach/1402980.htm 2019年9月3日

サポーターの皆さんへ

富山大学 総合日本語コース/日本語課外補講
18 後期「日本文化C」

担当講師 中河和子 ×××××@×××××.×××

2018/10/24

1. ワークショップの目的

- 1) さまざまな価値観・考え方に触れる→調整力アップ
- 2) 自分の日本語を外から見直す
→わかりやすく魅力的な日本語コミュニケーション力アップ
※日本人とのコミュニケーション力もスキルアップします
※コミュニケーション力は、日本企業が採用時にもっとも重視する力です
(経団連調査 2017 より)
- 3) 日本語を客観的に見るスキル→外国語学習にも役立つ

いろいろなことを対話することで、日本人学生・留学生が共に日本語力をつけていくことをめざします。

さらに、外国人・日本人共に日本社会・母国社会で自分が持っていた既成概念や思い込みを見直す機会にします。

このクラスでは、留学生ではない学生を「サポーター」と呼びます。

■トピック例

新入社員研修、ジェンダー（草食男子）、ステレオタイプ（多角的に見る）、私の〇〇（自己表現）・・・

トピックは、個人的/社会的ニーズや、人間関係の深まり、留学生の日本語レベルによって決めます。

2. 対話力について 活動をする前に考えてみましょう。

1)

問題 次の①と②のどちらが会話、どちらが対話の説明ですか。

- ①あまり親しくない人同士の価値や情報の交換、あるいは親しい人同士でも価値観が異なるときに起こる価値のすり合わせなど
- ②おしゃべり。価値観や生活習慣なども近い、親しい人同士のものが多い。

4. 対話するときに注意すること

(1) 態度・心理面で注意すること

主体的に聞く・話す

- ・相手に関心をもつ ⇒ 楽しむ・おもしろがる
- ・全身でしっかりと聞き(傾聴)、相手の気持ちに共感し、受け入れる(受容)
- ・相手の話を引き出す、話と話をつなぐ
- ・自分のこと、意見も話す。ただし、「日本事情など教えてあげる」姿勢ではない。

(2) 言語面で注意すること

・やさしい日本語で話す

*ただし、相手のレベルに応じた話し方をする⇒これには経験が必要ですが。

・伝わりやすい言葉・表現を使う

意外と難しい表現の例：漢語、敬語、カタカナ

・筋道を立てて話す

(3) その他の注意点

・身近で具体的な例を挙げる

・「おいてきぼり」を作らない。グループ全体にも配慮する。

(4) よくある質問

Q1：相手がこちらの言ったことをわかっているかどうか、どうやったらわかるか

Q2：相手が何か言おうとしているが、日本語にならない、あるいは十分な日本語にならないとき、どうすればいいか

Q3：相手が間違ったときどうすればいいか

資料2 ふり返りシート

富山大学 総合日本語コース／日本語課外補講「日本文化C」 担当：中河和子

「国際人としてのグローバル日本語」ワークショップ＝対話活動 ふり返りシート

名前 _____

◆できるだけ1～3回全体（5/15, 6/12, 7/10）を思い出して書いてください。

1 対話を楽しむことができましたか。（できた 5 4 3 2 1 できなかった）
特に、印象に残ったことは何ですか。

2 対話を続ける（維持する）ことができましたか。（ 5 4 3 2 1 ）

・できたと思う人：なにがあったからできたと思いますか。

・あまりできなかったと思う人：それは、どうしてですか。何が大変でしたか。

・相手の言っていることがわからなかった時、その内容を理解するための工夫や努力をしましたか。
それはどのようなものですか。

・自分の言っていることが理解されなかったとき、理解してもらおうという工夫や努力をしましたか。
それはどのようなものですか。

3 対話のスキルについて

今回は「聴くスキル」についてのみ、ふり返ってください。

（できた○ まあまあ△ できなかった×）で答えてください。

①「聴く姿勢」になっていましたか？（目線、体の向き、姿勢など）（ ）

②話し手が考えている間、少し沈黙があっても待つことができましたか？（ ）

③うなずきやあいづちなど、相手の話にしっかり反応を示していましたか？（ ）

④話を聴いている間は、次に自分が話すことや別のことを考えたりしないで、相手の話に集中していましたか。（ ）

⑤自分の興味・関心に引きつけて聞かず、相手が伝えたいことが何かをじっくり考えようとしていましたか。（ ）

⑥相手の伝えたいことと自分の理解が合っているか、質問や繰り返しをして、時折確認しましたか。（ ）

4 その他、このワークショップ＝対話活動に参加しての感想・コメントを何でも書いてください。

*実際に配布した資料には、一部の漢字にふりがなをつけてある。

考えてみよう 留学生と日本人学生

2019/07/10 中河和子

1. 留学生 A さんの相談

留学生センターの事務スタッフの田中さん（45才）は、留学生のAさんから、次のような相談を受けました。

「日本人学生と、なかなか親しくなれない。せっかく日本に来たので日本の事を色々学んだりするためにも、日本人の仲のいい友達がほしいのに。」

2. 留学生と日本人学生、それぞれの立場から「率直に」考えてみてください。

◆今回は、「自分の日本語が上手じゃない」という障害は、大きく考えないことにしましょう。

「自分の日本語が上手じゃないことが一番大きな障害だ」と言う外国人がいます。本当にそうでしょうか。この「日本文化」のクラスくらい日本語が話せる外国人と日本人の仲良し（親しい友人）は、多くはないけれど、確かにいます。また反対に、日本語が上手だけれど、日本人の友達がほとんどいない外国人も多くいます。日本語の上手さは、実はそんなに大きな問題ではないと、言えます。

今回は、「自分の日本語が上手じゃない」という障害は、大きく考えないことにしましょう。

参考：自文化中心主義（ethnocentrism）＝その国の言葉や文化が全部わからなければ一人の市民・人間として認めない人々、すなわち自分の国が一番えらい、正しいと思っている人々は、自文化中心主義（ethnocentrism）と呼ばれます。

3. まず、あなたにとって、友人の「大事な条件・ポイント」を考えてみましょう。

現代は、同国人同士でも、親しい友人はできにくい時代と言えます。あなたの友人経験から、あなたにとっての友人の「大事な条件・ポイント」をあげてください。

最初から「明るい人」「積極的な人」という形容詞をあげるより、自分の友人経験を話して、そこから「自分が友人に選んだ人/選ばなかった人は、こんな人だった」と、ボトムアップ（bottom up）で考えた方が、はっきりポイントが見えます。

*実際に配布した資料には、一部の漢字にふりがなをつけてある。



3. で考えた「条件・ポイント」に合う人は、留学生にも日本人学生にもたくさんいるはずなのに、留学生と日本人学生の仲良し（親しい友人）は、まだまだそんなにいないように思います。

何が障害になっているのでしょうか。何が理由でしょうか。

4. それぞれの立場から、考えてみてください。

留学生へ

1) あなたは、留学生のAさんの相談のようなことを感じたことはありますか？あるとしたら、どうしてなかなか親しくなれないと思いますか？ 以下の点を参考にして、考えてみてください。

①考えられる理由

- ・自分個人に関わる理由
- ・知り合う機会の少なさや、習慣や制度（しくみ）に関わる理由

②その他

2) あなたは、留学生のAさんのようなことを感じたことはありますか？

ないとしたら、どうしてですか？ 何でも言うてみてください。

例：同国人という方が気が楽だから。

お互い忙しくて、友人を作る暇がない。

日本に来たのは、友人を作るためではなく、研究と学位（Master's Degree, PhD. など）を取るためだから。

日本人学生へ

3) あなたは、「日本人学生と留学生がなかなか親しくなれない」という留学生Aさんの意見を、どう思いますか。それに関して、以下の点を参考にして、考えてみてください。

①考えられる理由

- ・自分個人に関わる理由

②その他

4) グループで、外国人と日本人が仲良しになるときに、障害になっていると思うことを皆であげてください。

*実際に配布した資料には、一部の漢字にふりがなをつけてある。

5. 発表に向けて

1) か2) を話し合っ、発表してください。

1) どんな人だったら、友達になりやすい？

外国人と日本人が、友達になることは、そんなに簡単なことではないかもしれません。あなたは、どんな話し方、態度、考え方の人だったら、まず話ができ、それから友達になっていけると思いますか。

外国人は日本人について、日本人は外国人について、今まで話したことや自分の経験などをもとに考えてください。

2) あなたが、留学生センターの田中さんだったら、留学生 A さんの相談を受けて、どんなことをやってみますか。または、個人としての行動でもいいです。

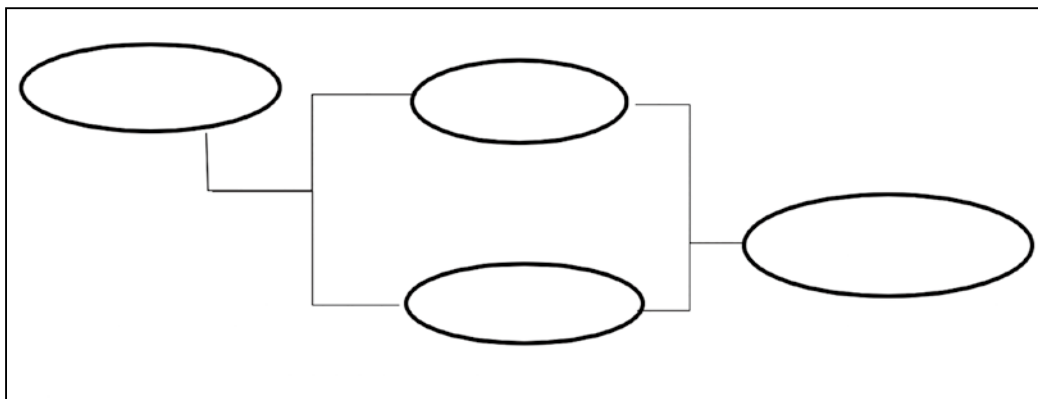
発表に際して

★下のように構成 (structure) を考えましょう。

○ は、キーワードの付箋紙が入ります。

これが小さい話題にもなります。

構成例：



*実際に配布した資料には、一部の漢字にふりがなをつけてある。